

澁谷繁樹さんを偲んで



故入院貞子さんが平成17年（2005年）秋に『炉ばたセイ談』第1号を創刊された当初から『炉ばたセイ談会』のメンバーであり、初代会長・故桐野三郎さんの後を継いで平成29年（2017年）から第二代目の会長をして頂いた澁谷繁樹さんが令和3年8月20日に永眠されました。満69歳でした。

澁谷さんは昭和27年（1952年）生まれ。早稲田大学政治経済学部政治科卒業。南日本新聞社入社後、社会部、川内支社、文化部、宮之城支局などに勤務。平成12年（2000年）編集部長。平成15年（2003年）から編集局編集委員。

1
平成21年（2009年）3月1日から平

成25年（2013年）3月末までの4年間、南日本新聞社の読者室長として、MBC（南日本放送）テレビで毎週金曜日の午後6時54分から放映の『読者室から』という番組に出演、県民なら誰一人として知らない人はいない、金曜日の夕方の顔になりました。『四百十字の裏で』というエッセイに次のようにあります。

午後六時五十四分前、鹿児島県の民間放送の一局で、一週間に一回報道随筆を担当している還暦を過ぎた新聞記者は、時刻ギリギリまで、何をしゃべるか、迷っていた。あらましは原稿にして事前に送信しているけれど、口を開いたらゼンゼン別の話になってしまう場合もある。

出番が来た。「こんばんは」とスタジオのアナウンサーに呼びかけられて、二分間、字

数にして四百三十、テレビ随筆が始まった。
 (中略) 放送で引用する俳句類は鹿児島の人
 がつくった作品に限っている。今回は随筆内
 容に即したわかりやすい俳句だったかなと考
 えながら、最後の決まり文句の「読者室でし
 た」につないでいく。『炉ばたセイ談』No.
 8号(平成24年秋発行)より抜粋)

南日本新聞社を退職後は、鹿児島県NIE
 教育に新聞を推進協議会事務局長として
 ご活躍されました。

『炉ばたセイ談』との出会いについて、会
 長就任挨拶で触れておられたので、以下に全
 文を転載いたします。

セイダンと関係ができたのは、入来院貞子
 さんから襲われた、が理由になる。

新聞社の文化部のペイ。ペイだったころ、貞

子さんは新聞社によく出入りしていた。文化
 関連の催しでもしよっちゅう顔を合わせたけ
 れど、知性は屹立、弁も立つブンカオバサン
 だなと、あまり近づかないようにしていた。
 だいたいにしてからが、公にしる酒の席にし
 ろ、いろいろ談義は苦手で、滔々たる教養の
 流れには溺れてしまう。

敬遠しているとナゼカ向こうから近づい
 てくる。大学一年生時代のスキー小屋で、ウ
 イスキーで酔っ払った四年生の素敵な女セン
 パイから「シブチャン、もてようと思つたら
 ね、無視するの、知らん顔してりやにじり寄
 ってくるんだから。それと、相手が団体の場
 合は、コンパなんかだけどね、一番さえない
 のに優しくするの。そうしたら、一番いい女
 が手に入るんだな、これが」と、教えてもら
 ったのを思い出す。

そうそう逃げ回ってばかりもいられない。

たまにはおつきあいするうちに、大学の先輩だと知れた。加えて、夫君も同じ大学、しかも同じ学部の大先輩だと判明した。

十五代沈壽官氏との出会いとよく似ている。鹿児島料理屋、顔も知らないのに論争になり、表で決着をつけようと腰をあげかけたら、氏が「ところで、はんな、大学な、どこな」と聞いてきた。「ワセダ」「おいもじやが、学部は」「セイケイ」「じゃつとなあ」。言い争いはどこかに行つて、今日は呑んど、オウ、となつてしまった。

入来院夫妻との場合も、先輩後輩とわかつた途端、頭があがらなくなつた。セイダンを発刊したい、ついでにはアナタも会員にするから、とテイコサンから申し渡され、新聞記者としてひとつの雑誌に所属するわけにはいかない、取材は公平が原則だからと抵抗したのに、一顧だにされず、もう決めたの、と押し

通されてしまった。

桐野三郎会長逝去を受けての新会長選びも同じだった。髪の毛がなくなつた六十五歳にもなつて、情けないといつたらありやしなけれど、大先輩のオマエがせいとの一言に、任でもないしガラでもない抗弁を口ごもつただけで、押し切られた。

知性は薄っぺら、人格頼りなく、覚悟もフラフラ、でも、一つだけは自慢できる。大先輩をはじめ会員諸氏がいずれ劣らぬ宝石ぞろいで、会長がフワフワでも、なんの心配もない。

それにね、テイコサン、そもそもはアナタが原因なんですからね、アナタに襲われなきや新会長だつて、なかつたんですから。

以上、『炉ばたセイ談』No13号(平成29年秋発行)よりの転載でした。(下)

嗚呼、一杯一緒にやりたいね！

入来院重朝

澁谷君。君が病に臥せていることは知っていた。どういう経緯であったかは覚えていない。

君が、ぼくの妻貞子の葬儀の折、重朝さんのときには僕らが葬儀委員長を務めますと云っていたのを覚えている。たしか沈壽官君も一緒にその時はいた。それが何たることか、君が先に逝ってしまうとは。人の命はママならない。

ぼくは昔、小学校六年生の卒業の年、丁度中学入試の春、両方の肋膜炎、ついでに腹膜炎を患い九死に一生を得た。その時、夢現に見た三途の川が、オトナになって現実に見たインドのインダス川にそっくりだったことに、

一寸びっくりしたものだ。

さて、生きているといろいろ経験するが、すべて前世の約束ごとのように思われる。ぼくもとうとう今年九月で満で九十才になる。全く無為に生きてきたような気分である。しかし、思えばいろいろな人と知り会った。何よりも今は亡き妻が恋しい。彼女に知り会えたことが何よりの私のしあわせであった。

そして澁谷君。君にはいろいろお世話になった。思えば泣きたくなるよ。嗚呼、一杯一緒にやりたいね！

人の一生は、それぞれ違う。皆自分だけの一生なのだ。文字通り有難いことだ。感謝あるのみだ。合掌。(炬ばたセイ談庵主)



一生忘れない大切な思い出

入来院久子

私が澁谷さんに初めてお会いしたのは第1回「入来薪能」が開催された日。1999年の夏だった。薪能が始まる前に、来賓の方々が我が家に集合していたのだが、私は母から任命された司会担当のために、当日に手渡された原稿とにらめっこしていた最中だった。

浴衣姿で団扇を片手に現れた澁谷さんの粋な姿に「田舎にもこんな素敵な紳士がいらっしやったのか!」と内心感動したのを覚えている。後から、ローカルテレビの報道番組でコーナーを担当し出演している方だと知り、なるほど!と納得したものだ。

本当に澁谷さんはダンディでカッコよかった。声も素敵でお喋りの内容も楽しかった。

両親の大学の後輩というだけで、嫌な顔もせずに我が家の用事を頼まれてくださる優しい方だった。

大のお蕎麦好きで、父の米寿のお祝いにも我が家のキッチンで美味しい蕎麦を茹でてくださり、年末には年越しそばをわざわざ出向いて届けてくださったことは一生忘れない大切な思い出だ。

澁谷さん。闘病中にお見舞いできなかったことを父と共に深く悔やんでいます。

澁谷さんには直接感謝の気持ちをお伝えしたかったのに。こんな文面で大変申し訳ありませんが、心よりご冥福をお祈りしています。合掌



心より「冥福をお祈り致します」

下土橋 渡

てメールで送る。そうすると、

謹啓 結構です。

毎度お疲れ様です。

深謝多謝、恐惶。 澁谷 梓

入来院貞子さんが不慮の事故で亡くなられた平成23年の秋発行の第7号から中西喜彦先生と二人で編集を担当することになった。一年目は試行錯誤の年だった。中西先生は鹿児島市に、私はさつま町に住んでいたのですが、距離的にほぼ中間にある鹿児島市郡山町のファミリーストランの席を借りて編集作業を行った思い出がある。

2年目にはインターネットのメールでやり取りしながら編集を進める方法を試みた。いわゆるいま流行りの『リモート』である。それが上手く行くと、平成25年から澁谷さんにも編集担当に名を連ねてもらった。

編集したものをPDFファイルに落とし

などと、返信メールは決まってシンプルだった。それでよかったのである。何せ、新聞社の編集部長をされ、編集局編集委員をされた方に目を通してもらうのだから、自信がつく。コメントは短かったけれど、編集後記はいつも、あのダンディな文章で、割り当ての紙面いっぱい書いてもらった。

入来院さん宅で編集の打合せがあると、私たちも美味しい蕎麦をご馳走になった。

澁谷さん、ありがとうございます。

心より「冥福をお祈り致します」。

(炉ばたセイ談編集担当)